

令和2年7月10日

(故A医師の妹さまのコメント)

平成26年12月18日、兄は33歳の若さで旅立ちました。
あまりにも突然で、そしてあまりにも衝撃的な1日の始まりでした。
両親から電話があり、兄の家に駆け付けた事までは覚えているのですが、その日から数日間の記憶が抜け落ちてしまっています。
しっかりとした記憶がある時にはもう兄の姿はありませんでした。
最後に声を聞いたのは、亡くなる4日前の12月14日。この日が本当の最後でした。

兄が亡くなってから早いもので5年6ヶ月以上の月日が経っています。
これまで1日たりとも兄を忘れた日はありませんでした。
亡くなってからの数ヶ月は自分を責め続けました。
私は生まれつき心臓に障害があり、それもあり兄は医師を目指しました。
なので、自分の病気を恨み、そして代わってあげる事が出来なかった自分が許せませんでした。
それと同時に、病気の私が生き残ってしまい、両親や義姉、兄の子供達に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。
しかし、これまで沢山の方々に支えて頂き、そんな後ろ向きな毎日を送っていたら、兄が悲しむのではないか、きっと私自身が生きている意味があるはずだと思う事が出来、今は兄が羨ましいと思うくらい楽しく生きてやる！と思っています。
ですが、前向きに生きる決意したからといって、決して悲しみが薄れたり、立ち直ったりしたというわけではありません。きっと一生立ち直る事は出来ません。

両親は、兄が亡くなってから毎日ふさぎ込み、今でも前向きな気持ちになる事も出来ず、生きる意味をなくし抜け殻のような状態でなんとか日々を過ごしているような状態です。
見ていて痛々しいです。私にはどうする事もできない。悔しい日々です。
どうにか前向きに生きてほしいと兄も願っていると思うので、両親が少しでも前向きに生きて行ってくれる事が私たち兄妹からの最後の願いです。

今回、兄の死は過労死であると認められました。
“過労”という言葉は、言葉で言うだけだとそんなに重くない言葉に聞こえてしまうかもしれませんが、あっけなく人の命を奪って行ってしまいます。
人の命を突然奪い、その家族には途方もない悲しみが襲います。
それだけ重く重要な事なのです。

一般的に医師の仕事は患者さんの命を守る事が最優先だと言われています。
確かに人の命を預かるため責任は重大だと思います。
しかしその医師も私たちと同じように、“一人の人間”であるという事、そして365日、そ

の重たい重圧の中、患者さんのために働いているという事を忘れないでください。

兄の死から5年半以上もの間、裁判を通して、兄に対する心もとない言葉も受け、兄がこれまで頑張ってきた日々は無駄だったのだろうか、と感じる事もありました。病院の事務の方々も精一杯、病院の為に毎日働かれています。しかし、医師がいなければ病院は成り立ちません。その人たちを軽んじないでください。

私たち家族の悲しみや苦しみ、何より心に大きく空いてしまった穴は、どんなに時間が経っても埋まることはありません。出来る事ならば、兄を返してほしいと切実に訴えたいです。ですが、どんなに願っても兄はもう戻りません。このような辛く悲しい想いをする方々が、今後出ない事を、そして何より過労死で亡くなる方が一人も出ないことを切に願っております。

以上